TEI 鼎談 DAN
学問と職業のカンケイから、大学進学を考える本

あなたは、まだ何にだってなれる。

文教大学 教育学部

文教大学教育学部は1969年に設置され、以来、9,000人ほどの卒業生を教育界に送り出してきました。現在の教育学部は学校教育課程に10専修、心理教育課程に2コースを設置。教育者としての専門性を磨くことができます。

■大学生
中村保乃香 さん

■先生
三木一彦 先生

■卒業生
小澤啓登 さん

CONTENTS

●プロフィール　●大学生活について　●仕事について
●5年後に向けて　●高校生へのアドバイス

●プロフィール

教育学部の特長を教えていただけますか？

■先生
現在文教大学にある７学部のうち、教育学部は最初にできた学部で伝統があります。教員採用に関して実績が高いため、受験の際の志願者数をみても、ほかの学部に比べて高い倍率で注目を浴びています。
学科は学校教育課程と心理教育課程があり、学校教育課程で小中高の教員免許、心理教育課程で保育士の資格や幼稚園、小学校の教員免許を基本的に取得することができます。なかでも学校教育課程では2016年４月より英語専修を新設し、全部で10の専修から１つを受験時に選ぶことになります。英語専修では小学校免許とともに中学・高校の英語教員免許を取得できます。小学校でも英語による活動が導入されようとしている世の中の動きにいち早く対応し、英語に強い教員を養成します。

先生の研究分野を教えてください。

■先生

おおまかに言うと地理です。地理は自然地理と人文地理という理系、文系の地理に分かれますが、私は人文地理の専門で、その中の主に歴史地理学と呼ばれる分野を大学院以来研究しています。

高校の授業での地理は、例えば欧米の農業や民族問題に関することなど、基本的に現代の地理だと思います。歴史地理というのはもう少し過去にさかのぼって、その背景を探っていくような学問です。例えばヨーロッパの移民の問題があるとすれば、その根幹には植民地支配や第二次世界大戦があったというように過去から現代の出来事を説明する分野です。もちろん歴史学と同じ事象を扱うこともありますが、地理学では空間的に物事をとらえて地図に落とし込んでいくような把握の仕方をします。

これは授業でも話すことですが、私たちが日常的に食べているじゃがいもやさつまいものルーツを探っていくと、元はアメリカ大陸に存在した食べ物が海を越えてだんだんと渡ってきたという過程があります。日常で肉じゃがを食べる時に、ふと「これはどこから来たのだろうか」とか「じゃがいもはなぜじゃがいもという名前なのか」と考え、それを探っていくことで自分の身近なもののルーツを知ることができます。教科書上の歴史では偉人が何をしたかなどという話になってしまいがちですが、もう少し身近なところで、土地やもののルーツを明らかにしていこうということです。「過去」という鏡に照らして今を見てみることで、出来事が身近に立体感を持ってくるところが面白い学問です。

■大学生

三木先生の地理学のゼミに所属しています。先ほど先生が「昔があって今がある」という趣旨のお話をされていましたが、私は先生の授業を通して土地という基盤の上で生活が変わっていくことを学んで、それをとても面白く感じたので地理学のゼミに決めました。

■先生

中村さんは３、４年生でゼミに入ってからレポートなどを書いてもらうと、とても優れた視点を持っていることが分かりました。

■大学生

ありがとうございます。

先日「佐原地域と小野川を中心とした水との関わりについて」という卒業論文を提出しましたが、その中では土地に住んでいる方々にインタビューなどを行い、フィールドワークをしながら自分の考えをまとめていきました。私は人を中心にしたかったので基本的に聞き取り調査を主体に、足りない資料は近くの図書館で文献をあたって卒業論文を進めていきました。

●大学生活について

この大学に入ろうと思ったきっかけを教えてください。

■大学生

私はもともと教員になりたいという思いがあって、良い先生になるにはどの大学がよいのかなと考えていました。

そんな時に高校に置いてあった文教大学のパンフレットを見たのですが、模擬授業や授業作りに多くの時間が割かれていて、教員の採用者数が多いことがとても魅力的でした。オープンキャンパスにも足を運びましたが、のんびりとした雰囲気にも惹かれましたね。

■卒業生

私も中学生の時から先生になりたいという気持ちがありました。高校に入ってからは硬式野球部に入ったこともあり、まったく勉強する時間がなく、1、２年生の頃は教員になる夢もあきらめていま

した。ですが２年生の時に部活のひとつ上の先輩が文教大学のオープンキャンパスに行って、私が先生になりたいということを知っていたので「とても良かったよ」と教えてくれて、この大学のことを知ることができました。
結局、高校生活で打ち込んだ野球では甲子園には行けませんでしたが、今度は先生としてその舞台を目指そうという目標ができました。その夢に加えて、高校の頃の先生が高校教師は教員採用試験の倍率が高いから、幅広く教職を選択できる文教大学がよいのではとアドバイスをくれたことも決め手になりました。

■先生

教員になる学生は入学前に進路を決めていることが多いですし、学部ははっきり決まっていなくても、文学部や理学部に入って、教職課程をとりながら将来を見定めていっているようです。
教育学部なので学生たちは当然教員を目指して入学してきますが、教育実習などを含めて４年間学ぶうちに、自分には向かないなと思い始めて、10 人いれば１～２人は別の道に進む人も出てきます。教員と近い関係にある塾の講師や公務員、進学といった進路が多いですね。まったく関係ないところでは一般企業もありますし、卒業後も自分探しを続けるというケースもあります（笑）。

入学してからの印象を聞かせてください。

■卒業生

勉強しなさいと言われていた高校生までとは違い、大学では自分で勉強しなければなにも身につかないしどんどん置いて行かれると率直に感じました。こんなにも何も言われないことが自分には衝撃的でしたし、だからこそ自分でやろうと思いました。クラス全体としては勉強に前向きな雰囲気があったので、そこにうまく馴染めたことは大きいですね。

■大学生

入学前にのんびりした雰囲気を感じていましたが、実際に入ってみるとやはりのほほんとした大学でした（笑）。
授業に関しては先輩のお話に同感です。教育学部は基本的に皆が教員になりたいと思って授業を受けているので、教育実習や教員採用試験の際にも互いに気持ちを高めてがんばり合えたなと思いました。

入学後の授業や実習で印象に残っているものはありますか？

■大学生

授業は基本的に教員養成を目的としているので、授業の指導案をつくったり、仲間と協力して授業を考えて展開していったりする講義が２～３年生の時にたくさんありました。私は家が遠いので１～３年生の時には本当に大変でした。

■先生

1、２年生は講義が中心です。どの大学にもあるような外国語や、社会専修としては歴史、地理、公民の基礎を学ぶ講義があります。２年生くらいから学校での教え方などを学ぶ科目が少しずつ入ってきて、３年生の時には模擬授業というかたちで学生を子ども役に見立てた 10 ～ 20 分程度の授業を行います。それを見ていた先生が学生を評価する授業ですね。
また、本学ならではの試みとして、２年生の時には希望者が近隣の小学校で一週間かけて学校現場を体験する「先生の助手プログラム」もあります。このプログラムが始まってからおそらくもう 10

年ほどになりますが、越谷市には全面協力していただいており毎年お世話になっています。我々教員は最初のあいさつだけは引率しますが、その後の６日間は本当に学生のみです。このプログラムにはいち早く現場を体験してもらう意味がありますが、どうしても中だるみしがちな２年生に今一度モチベーションを上げてもらうという狙いもあります。

■卒業生

僕も越谷市の小学校に行かせてもらいました。やはり生活がたるんでいた部分がありましたし、「自分が将来なりたいのは先生なんだな」と再認識することができました。

主に現場の先生方のお手伝いでしたが、客観的に見て先生たちの忙しさや、子どもたちと接している時には一分一秒たりとも気が抜けないという部分が肌で感じられて、いつまでも大学生気分ではいけないなと思い知らされた一週間でした。

■大学生

私も参加しましたが、初めて学校の教育現場を見せてもらい、小学１年生を見ていてかわいいな、やはり先生になりたいなという思いが強くなりましたね。

ゼミではどのような活動をされていたのですか。

■卒業生

僕も中村さんも三木先生のゼミに所属していて先輩後輩の仲でした。活動としては、３年生の夏休みはゼミ生だけのフィールドワークに行きますが、自分たちは広島に行きました。

■大学生

一つ下の私たちのグループは沖縄に行きました。それぞれ自分の調べたいこと、疑問に思ったことからテーマを選んでそれを報告にまとめます。

■先生

フィールドワークではかなり遠方にも行きます。春から準備をして、宿を６月までには決める感じですね。

■卒業生

当時の三木先生のゼミは 10 人程度のメンバーでしたが、各々現地まで行って、初日は皆で行動し、２～３日目は個人でフィールドワークをします。４日目は個別で帰ってくることが多いです。先生方とは毎晩ご飯も一緒です。

■先生

ゼミは全員で 10 名程度なので和気あいあいとしてかなり仲良くなるよね。

アルバイトなどはされていなかったのですか。

■大学生

1、２年生の時にイタリアンレストランのホールを、今は塾講師をしています。

■先生

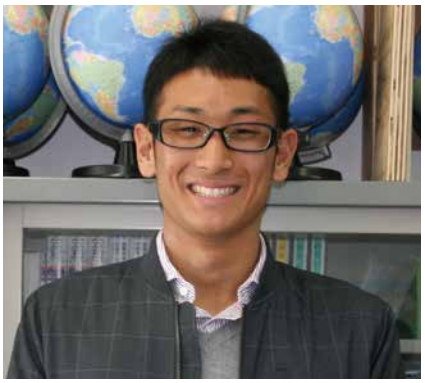
塾講師、家庭教師は将来の練習になるので、やっている学生は多いよね。

■卒業生

僕も塾講師は１年生の時にやりました。他にも飲食店、スポーツ用品店、２年ほど家庭教師としても教えました。

●仕事について

いまは中学校で先生をされているそうですね？



■卒業生

社会科の教員として、1、２年生に歴史と地理を教えています。１年生の地理で世界のことを学んだあとに、２年生で日本のことを勉強する流れになっています。まだ１年目ということもあって、授業の準備にはとても長い時間をかけています。学校に夜遅くまで残ったり、朝早く来て部活の前の１時間程度を使ったりしています。

同僚の先生方は３～４年目の若い先生が多く、本当に仲良くさせてもらっています。授業の進め方などで悩んでいる時でも、若手の先生同士で相談をするなど公私ともに助け合っています。

また、勉強を教えるだけでなく野球部の副顧問もやっています。自分も学生時代に野球を何年もやってきたので、朝練や土日の練習も含めて積極的に指導しています。とはいえ本業は学業なので、例えば夏休みの間は練習前の午前中の２～３時間ほど宿題の時間をとってあげるようにしています。他の先生方から課題が出ている場合などは、自分が手伝ってあげることもありますし、生徒たちがどちらも両立できるようにサポートしています。

赴任したての４月頃や夏休み前と現在を比べてみると、生徒たちが身体も心も成長していて、それを見られるのが教員としてやりがいを感じる部分ですね。最初はまったく分からなかったことが、自分の授業を通じて分かるようになってきたなどと言われると、とても教え甲斐があります。

●5年後に向けて

将来やりたいことや目標はありますか？

■大学生

４月から教員として勤め始めるので理想の教師像になると思いますが、私は持ち前の明るさを活かして、何歳になっても子どもたちと遊んで明るく楽しくできる先生になりたいですね。一方で、それだけでは足りないということを教育実習で学びましたので、自分を見つめて、磨く努力をしなければいけないなと思っています。おそらく子どもたちには甘い方なので、意識的に厳しくならなければとも思います。

■卒業生

しかり方は難しいです。教わるというよりは先輩を見て学ぶ感じかな。

■大学生

はい。私は教育実習に加えて、自宅近くの小学校で週一回ボランティアをしているので、そこで実際の先生方の指導法を見て学んでいます。

■卒業生

かつて考えていた「先生になりたい」という夢はかないました。最近では同僚の先生とも、先生になった今後どういう将来像を目指すかという話になります。

５年後というと今の教え子たちが、高校３年生や大学１年生になる年です。成人式を経て教え子が大人になった後も関わっていけるような関係作りを今からしていきたいです。子どもたちが大人になった時に、「先生のクラスが楽しかった」と良い思い出になるようなクラスづくりが理想です。そのために今、授業や学級、部活でもいろいろな経験をさせていきたいなと考えています。これは周囲の若い先生方と話しても、同じ考え方の人が多いです。

先生ご自身はどうでしょうか？

■先生

これまでの研究成果があるので、今後もこのやり方で進めようと思ってしまいがちですが、そこで新たなものにも興味を持って学んでいく姿勢は忘れたくないですね。

特に私が教える地理学では、世の中を常に追いかけていく必要があります。ここ半年ほどの流れでは移民、難民の問題にはたいへん注目しています。今彼らを大量に受け入れている米国やドイツから批判されかねないため、日本も受け入れざるを得ないような状況になるかなと個人的には考えています。

だんだん歳を取って体は固くなってしまいますが、頭の方は世界の流れに敏感に、常に柔軟でありたいなと思っています（笑）。

教育と地理学には、どのような関係がありますか？

■先生

地理学は身近なものや土地に興味を持つ学問です。例えば彼らは教育実習に行くわけですが、その際に少しでも時間があればただ学校に行くのではなく、周りの博物館やお寺にふらっと行ってみるなど、その土地の様子を自分の目や耳で確かめてみなさいと言っています。

高校生にも同じ事が言えて、大切なのは自分の周りをよく見てみることですね。特に社会科でいうと、小学校でも中学校でも地域学習といって、自分の学校のある身近な地域のことを学ぶ機会があります。学校の地域学習のリーダーを育てたいというのが社会専修のひとつの目標なので、こういった学びが社会科の教師や小学校の教師を目指すきっかけになると思います。東京にでかけるのも良いですが、一度自分の住んでいる地域を見つめてみてください。

■卒業生

地方から都会の大学に出てきて戻らないケースは増えていますよね。僕のように地方から来て、また戻るというのは少数派だと思います。

■大学生

私の同級生にも佐渡島や福島県出身という人がいましたが、結局文教大学を卒業後は埼玉県で先生になります。今は地方よりも都会の方が教員採用試験の倍率は低いので、そのまま都会で先生になるという流れが多いのだと思います。

■先生

地方に戻りたくないというよりは、戻りにくい状況に世の中がなってしまっています。こういう時代においてはなおさら、地元を見つめ直す地理学の意義が増していると感じています。

●高校生へのアドバイス

もし自分が高校1年生に戻ったら何をしたいですか？

■大学生

私はバレーボール部でしたが、かなり強いチームだったので、土日はずっと練習していました。部活一色で、授業も部活のために体力温存で寝るような感じになっていました。教員採用試験を受ける際に感じましたが、多くのことを色々と勉強しなければならなかったので、基礎学力をもっと高校時代に養っておけばよかったなと思います。

高校生の頃は大学に入ってから勉強すればいいと思っていましたが、そうではなく、中学の基礎を

復習するでも高校の授業を真面目に受けるでもよいので、未来を見据えるのであればしっかり勉強することが大事だと思います。

■卒業生

自分も中村さんと同じような生活だったので、やはり勉強も大切だと思います。でも最近、子どもたちには勉強だけではなく、生き方や考え方も教えなければならないなと思っています。そういう意味では自分自身が様々な人の考え方を知らなければならないと痛感しています。もっといろいろな場所に旅行に行ったり、本を読んだりして見聞を広げることが高校１年生には必要かなと思います。勉強は受験が近づく２～３年生になれば、自然にできるようになると思います。

こちらの学部をめざす高校生にアドバイスをお願いします。

■先生

「良い遊びをすること」ですね。教員という仕事は対人の仕事で、いろいろな人と触れ合います。それを考えた時に、ただ勉強しているだけで良い先生になれるかというと疑問です。人間としてのある程度の幅が必要なので、部活や友人関係などでいろいろな体験をしてください。

そういえば小澤さんは昨年ゼミ長をしてくれていました。個性的なメンバーが多かったので、おそらく彼がいなければゼミは崩壊していたでしょう（笑）。彼は良いまとめ役になっていて、その時のリーダーシップが今の仕事に役立っているのではないでしょうか。

■卒業生

少しでも役に立てたならうれしいです。

私から高校生に言えることは、実際に見ないと分からないことは多いと思うので、オープンキャンパスに行くことをおすすめします。あとは自分は高校の部活の先輩がたくさんいたので、例えば一緒に食事している時に「大学生活どうですか」と聞いていました。大学の楽しさや部活・サークル活動について尋ねてみるのも大学生活をイメージするひとつの手かなと思います。

■大学生

中学の頃からのあこがれのまま教員を目指してきましたが、就職の時期になって自分のやりたいことが見つからない人はたくさん居るように思います。大学生のうちに自分のやりたいことを見つけられれば良いのですが、高校から、将来の目標ややりたいことをしっかり考える必要があると思います。

■卒業生

単純に偏差値が高い大学に行きたいというような子たちが、結局は進路に迷っている印象があります。自分のしたいことを真剣に見つめて進路を決めていく必要がありますね。

受験勉強の際に工夫されていたことはありますか？

■卒業生

自分は 11 ～ 12 月の直前模試でもすべてＥ判定で、これはまずいと思っていました。そんな中でとにかくひとつでも得意教科をつくろうと、好きな地理をひたすら勉強しました。ずっと同じ教科では飽きてしまうので、場所を変えたり、高校生にとっては値段の高いカフェに行ったりして、やらざるを得ない状況をつくっていました。勉強に疲れたときには思い切ってやらずに、部活にお手伝いで参加して汗を流して息抜きをしていました。

■大学生
私は２回受験していますが、現役の時には本当に勉強に身が入らず、受験時期に、学校の補講や予備校などを手当たり次第に取り入れましたが、効果は出ませんでした。
その経験もあって、浪人時代は予備校ではなく家や図書館で自分だけで勉強していました。１年あったので一人で勉強することに不安はありませんでしたが、模試はしっかり受けていました。予備校もただ行くだけでなく、そこで勉強したことを自分で復習して還元できなければ意味がありません。行っているだけで安心してしまうなら逆効果だと思いますね。
浪人時代は勉強で缶詰になってしまいがちですが、私は料理をするなどして気分転換していました。受験の前日は良い入浴剤をお風呂に入れて、気分をやわらげて試験に臨んでいました。

最後に文教大学の一番の魅力は何でしょうか？

■卒業生
自分が教育学部に入って感じたのは、教員になるための道が示されているということです。カリキュラムの中では、模擬授業はもちろん現在の教育の課題など、先生になるための総合的な知識が身につけられます。また、学校でのボランティアなどの際にも、大学名を聞かれて「文教大学です」と答えた時に、文教大学の学生さんならと言ってもらえるほどにネームバリューがあったことも助かりました。いまの職場でも文教大学出身と言えば、なるべくしてなったと思ってもらえるのは大きいですね。先生になりたい人には絶対におすすめです。

■先生
本学は都心にあるマンモス大学ではありません。そのかわり小回りの良さが活かされて教員と学生の距離がとても近いことが自慢です。
ゼミでも教員と学生が一緒に卒業旅行に行きますし、専修という単位でまとまりがあるので、学園祭であればお店を出すなどの機会を通じて人間力が鍛えられるのではないでしょうか。
■大学生
カリキュラムの中で授業を作ることができますし、教職課程のほとんどの知識が学べます。先生方も「君たちは教員になるんだ」と常々言ってくださるので、こうした環境に４年間いられることで、教員への目的意識を保てる場所だと思います。
これは学生同士でも同じです。互いに切磋琢磨して意識を高めあうことができますし、教員採用試験直前になれば大学をあげて試験対策も行われます。実際にそこで出会った仲間と教員採用試験の対策もしました。先生になるという気持ちを保ちながら大学生を続けることで、自分自身の適性についても見つめ直す機会を得られたと感じています。
社会専修は仲が良く、小澤さんのような先輩や自分の後輩とも仲良くしています。先生方とも会えば気軽にお話しできますし、学校に行くことは、いつも楽しみです。

●インタビューに答えていただいた方々●

■先生

三木一彦 先生

文教大学教育学部 准教授
京都府私立立命館高等学校出身。筑波大学第一学群人文学類卒業。筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科史学専攻単位取得満期退学。文教大学教育学部専任講師を経て現職。

■卒業生

小澤啓登 さん

茨城県内の中学校社会科教員（2015 年度取材当時）
栃木県立小山高等学校出身。文教大学教育学部学校教育課程社会専修卒業。現在は、社会科の教師として、中学 1、2 年生に歴史と地理を教えながら、日々教え子の成長を見守っている。

■大学生

中村保乃香 さん

文教大学教育学部学校教育課程社会専修 4 年生（2015 年度取材当時）
千葉県立幕張総合高等学校出身。3 年次より三木一彦先生のゼミに所属し、学校教育とともに地理学を学んでいる。卒業後は教員として千葉県内の小学校に赴任予定。